

憧れの人に告白するって言ったら、

『は？ あなたが好きなのは俺ですよ？』と

ハイスぺ後輩に精神暗示をかけられて、

いちゃらぶ調教恋人セックスで墮とされました
塩対応ヤンデレ後輩の重い愛　サンプル

それは、桜の香る四月のことだった。

激務な私にやっと、部下ができるってお達しがあつたので——はりきって挨拶にいった。

「初めまして。白石くん……だよな？ 私、君のOJTを担当する——」

デスクに座っていた彼は、私を振り向いた。

さらさらの黒髪。涼しい目元。

あら、イケメン……なんて思っていたら、彼はその綺麗な顔をしかめて言った。

「OJT……？ 必要ですか、それ」

「えっ」

「……失礼ですが、先輩の指導は俺には必要ないかと思えます。むしろ時間の無駄で、非効率です」

——み、見下されている感が、すごい！

そういえば部長、「君のところに、優秀な若い子回すからね！」って言いつつ、

何か顔、ひきつったけど……こういう事か。

「で、でも、もしかしたら、わからない事もあるかもだし、なんでも聞いてね……？」

とりあえずそういうと、彼はもう一度、じろりと私を見た。

「ないです。あと業務外の会話もするつもり、ないので。仕事上何かあったらメールかチャットに投げてください。対応しますから」

そう言って彼はパソコンに向き合って、うんともすんとも言わなくなっちゃった。

「そ、そう……」

ひ、ひえ……。すごい子が、部下に来ちゃったな……。

と、部長を若干恨みかけた私だったけど、たしかに白石くんは、有能であった。た。

今まで山積みだった仕事が次々と消化されていって、多めだった残業も減っ

て、私は純粹に白石くんに感謝した。

「白石くんすごいね！　今まで月末はピーピー言ってたけど……最近納期に余裕あるよ！」

白石くんは嫌がるが、私はしつこく白石くんに声をかけ続けていた。

一応OJTだし……ね。

「は？　そんな事言ってる暇あるなら先輩も手動かしてください。追加のファイル送っておきましたから、確認お願いします」

隣のデスクでそうぼやかれたので、ファイルを開く。

「わっ、ありがとう。あ、すでに全部処理済ませてある……ごめん、私の仕事なのに」

「……はあ。別にかまわないです。できるからやってるだけなんで」

嫌そうにそう言いつつ、白石君はいつも、私がいつも余分にやっていたような仕事を、自分の仕事ではないのに請け負ってくれていたりする。

——口は悪いけど、根はいい子なんだよね。たぶん。

「ふふ。ありがとね。白石くんが来てくれて、ほんと助かったよ」

「……んなことよりさっさと確認お願いします」

心からの感謝は、白石君に綺麗にスルーされた。

あれ？　けど白石君の耳元が、なんかちょっと赤いような？

その瞬間、ポン、と肩を叩かれた。

「おっ、そのファイルもう出来上がった？　助かるわ」

「あ、朝倉先輩！」

ドキンと心臓が跳ね上がる。

朝倉先輩——何を隠そう、入社以来、ずっと私が憧れている人だ。かつこよくて、頼れる兄貴肌で、男女問わず皆に好かれている。

「すごいなー。昨日来たやつが、もう出来上がってるなんて」

朝倉先輩が、私のパソコンの画面をのぞき込みながら言う。

あゝ近い、近いです先輩ッ！

こうやって距離が近いのが、こう、罪な人なんだよなあ……

なんてドキドキを抑えながら、笑顔を浮かべる。

「そうなんです、白石君が早く仕上げてくれたんですよー」

「そうかぁ。さすがだなぁ。大型新人」

朝倉先輩が気さくに白石くんに話しかける。が――

「別に。仕事ですから。朝倉さんも仕事に戻っては？」

私に対応するよりも、もっと冷たい目で、白石くんは朝倉先輩を睨んでいた。
な、なんか敵意ない？

「はは。手厳しいなぁ。無駄話ついでなんだけど、部長が、今夜部署で飲み会やるってさ。二人は来る？」

先輩からの誘い。私は二つ返事でうなずいた。

「金曜ですもんね！ 行きます！」

「白石くんも、予定なかったらおいでよ」

微笑む朝倉先輩。

でも白石くんは飲みケーションとか絶対嫌いだろうから、多分来な……。

「わかりました。行きます」

「えっ」

「オッケー。じゃ、二人参加って伝えておくわ」

朝倉先輩は去っていった。

すると、白石君がじろっ、と私をにらんだ。

「えっ、ってなんですか。俺に来てほしくないんですか」

「いや、白石くんが飲み会来るなんて、意外だなーって」

白石くんがぼそつと毒づく。

「……別に俺だって、行きたくて行くわけじゃないですし」

「ん？　なんて？」

「なんでもないです」

なんか、めっちゃ機嫌悪そうだな……。

こんなんで飲み会、大丈夫かな。

◆
飲み会のさなか。

朝倉先輩とお話できるチャンスが、あったりしないかなあ……と、彼の方を見るが、先輩の周りにはイケイケの上司や、美人の女の子たちが群がっていて、とても私なんて近づける雰囲気ではない。

「はあ……」

思わずため息をついてグラスを傾ける。すると同じテーブルに座っている同期の女友達が、慰めてくれた。

「まゝ人気だよね、朝倉先輩はさあ……。にしても、あんたも一途だね。入社以来ずっと朝倉先輩一筋？」

私はタイプじゃないんだよねえ、という同期に、私はうなずいた。

「うう。そりゃ、まあね……」

「少しはよそ見したっていいんじゃない？……最近あんたんとこ、イケメンの

後輩来たじゃない。ほら、うかうかしてたら誰かがかつさらっちゃいそう」

白石くんは少し離れたテーブルで、若い女の子の社員たちに囲まれていた。

「わあ、人気だなあ。あんな塩対応なのに……」

ちら、と見ると、女の子たちに白石くんはしかめっつらしていた。

が、女の子たちはそれでもメゲず、話しかけ続けている。

「よくやるなあ……みんな」

「まあ、すごいイケメンだもん。それで仕事もできるとくれば、狙う子もいるでしょ」

「すごいガッツだなあ……」

「あんたも少しはガッツだして、朝倉先輩の隣の席取りに行ってみたら？」

「そ、そうだね……」

「そうよ。だってここだけの話、朝倉先輩、今度……あつ、今となり開いた！

今だよ！」

同期がけしかけるので、私はグラスを手に立ち上がった。

いつもなら行けないけど、お酒で気も大きくなっている今なら——！
ふらり、と先輩の方に向かって歩き出すと、ふいに座布団に足がひっかつ
て——

「わっ」

まずい、転ぶ！

「ちよっ……と、危ないじゃないですか」

「し、白石くん……？」

ずっこける、と思ったら、白石くんが私の腕をぎゅっと支えていた。

細身に見えたけど、意外と力が強いんだな……身体も大きい……。なんてぼ
んやり思っていると、白石くんが盛大に顔をしかめた。

「何ぼーっとつたつてるんですか」

そう言われて、私は自分の目的を思い出した。

私がかうかしている間に、先輩の隣にはもう、別の女の子が座っていた。

「あ、先輩の隣……ああ……」

わかりやすく落ち込む私を見て、白石くんは言った。

「何？ ああ……朝倉さんの隣、狙ってたんすか」

凶星を突かれて、私はあわてて否定した。

「ち、違うよ、そういうんじゃないから別に」

白石くんにぎゅっと腕を引かれて、さっきいた席に誘導される。

「チッ……戻りますよ」

「だ、大丈夫、歩けるよ」

「そう言ってさっき転んでたでしょうが」

なすがままにされてると、まるでこう……。

「あはは……介護されてるみたい」

すると白石くんは、私をちらっと睨んだ後、ふっとふき出した。

「はは……介護で。護衛とか騎士とかじゃなく？」

「だって私の方が年上だし」

言いながら、私は笑う白石君の顔に目を奪われた。

初めてみた。笑うところ。

「……なんすか、そんな見て」

「白石くん、もっと笑えばいいのに。笑うとかっこいいんだから……」

「は……」

白石君の目が見開かれたあと、その顔が、真っ赤になる。

「な……に言うんですか。そういうの、セクハラ、ですよ」

「あーたしかに、そうかも……。ごめん忘れて」

そう言いながら、私をもとの席に座らせて、なぜか白石くんも隣に座った。

すると向かいの同期は、やれやれと肩をすくめた。

「あーあー。せっかくチャンスだったのにねえ。コケてフイにするとはい、あんたらしい」

「うう……言わないで」

同期を止める。なぜなら白石くんは、黙っているけど——めっちゃ私たちの会話を聞いている気配がするからだ。

「それじゃあさっきの話の続きだけど、ここだけの話、」

「あ、あの、その話はあとで——」

「朝倉先輩、来月から本社に引き抜かれるらしいよ」

「えッ」

ビッグニュースに、私は隣で白石くんが聞いているのを忘れて、身を乗り出した。

「本社って……東京、いつっちゃうの？」

「そう。もう戻ってこないんじゃないかなー。東京に骨を埋めるかもね」

「そ、そんなあ……」

うつむく私に、同期は発破をかけた。

「先輩さあ、こないだあんたの事、褒めてたよ。一生懸命なところがカワイイって」

「え、っ!？」

同期がウインクする。

「送別会やるだろうから、そんなとき、隙作ってあげよーか？」

「えっ……いいいい、いいの!？」

「いいよーん」

同期が請け負ってくれたので、私はぎゅっとグラスを握りしめた。

——私が告白なんぞしても、万に一つも勝ち目なんてない、と、思っていたが。

ある、かも、しれ、ない……？

「よし」

私はグラスを持ち上げて、残ったお酒を景気づけに飲み干した。

——ごくごくごくごく、ぷはあ。

「や、やる。私、伝える……!」

「よし、そのイキだ」

うう。普段しない一気飲みなんてしちゃったから、視界がまわる……。

「はあ……私ちよっとトイレ行ってくるね……」



ちよつと飲みすぎちゃったな。先に抜けさせてもらおう…。

幹事に声をかけて、通りに出る。けど、頭がぐらくらする。駅まで歩くのもしんどい……。

とりあえず、道路の端の手すりにもたれかかって、しゃがむ。

ちよつとだけ……ちよつとだけ休憩……。

と、思っていると、肩を叩かれた。

「だらしないですよ、先輩。こんなところで」

白石くんがしかめっ面で見下ろしていた。

「あれ、白石くんもかえるの……？」

ふわふわした頭で見上げると、白石くんは何か、痛みでもこらえるような顔をしたあと、うなずいた。

「はい。別にいる意味もないし。ていうか、ほら、立てますか」

「だいじようぶ。ちよつと休んだら駅まで行くから」

「何バカなこと言ってるんですか。こんなところで危ないじゃないですか」

白石くんは、私の手を取って立たせた。

「休むにしても、場所考えてください。ほら、あそこにネカフェありますから」

「え？ ああ、うん……」

白石くんが私に肩を貸して、あれよあれよという間に、個室に通されていた。ふかふかのマットレスの上にはふんと座り込んで、白石くんにお礼を言う。

「あゝ……ごめん白石くん、ありがと……もういいから……うう」

ここで存分休もう。そう思って身体を丸めると、白石くんが隣に座って、ぼそつとつぶやいた。

「……自分の限界もわかんないとか、その年でどうなんすかね」

「う、うう……いつもはこんなすぐに回らないんだけど、ね……ちよつと動揺しちゃって」

先輩の引き抜きのことかあつて、気持ちが乱れてしまった。

「……ふーん。じゃあ今酔ってるのは、気持ちになるところが大きいんじゃないですかね。気の持ちようで治りますよ」

「そ、それはどうか……？」

「フツ、たしかに先輩、そういう自己コントロール、下手くそそうですね」

「ええ……じゃあ白石くんは得意なの？」

「そうですね。自分に思い込ませるっているか……自己暗示ですよ。痛くても痛くない。そう上手く思い込めば、本当に痛くなくなる。科学的にも証明されています」

「へえ……すごいけど、私には難しそうだ……痛いものは痛いよ」

すると、じつと白石くんが私を見た。

「やってあげましょうか。暗示」

「えっ」

「すぐに立って帰れるようになりますよ、多分」

そう言われて、ちょっと好奇心が沸く。

「じゃ、お願い、しよつかな……」

すると、白石くんが薄く微笑んだ。

「じゃあ、目、閉じてください」

言う通りに目を閉じる。

「深く深呼吸して……少しだけ顔、触りますよ？ 俺の言う通りにして、楽にしてください」

白石くんの手が、私の目を覆うように、そっと触れる。

あ、手が冷たくて、気持ちいいかも……。

「今から先輩は、一番リラックスできる場所で、深い休憩に入ります。自宅のベッドをイメージしてください。今から10数えるうちに、そこに行きます。

1、2――」

ゆっくりとした声が、耳に響く。

白石くんって、こんなにいい声してたっけ……そんな事を思っているうちに、

じんわり身体が重たくなっていく。ちょうど眠りに入る寸前みたいに。

「これで、先輩はリラックスして、なんでも回復できる状態になりました。先輩——どうですか」

どこか遠くで、心地よい声が響いている。

あれ、これって誰の声だっけ？

でもああ、たしかにもう、気持ち悪くない……。

「ん……楽になった……すごく……」

この声に従えば、楽になれるんだ。

ふわ、と心地よいてのひらが、おでこを撫でる。

「先輩……所属と年齢と、今日の下着の色……を、言ってもらえますか」

「……黒杉商事、企画経営部、28さい、下着のいろは、みずいろ、です……」

「っ……はは……水色……マジか……。酒入ってるとはいえ……先輩、めっ

ちや暗示、かかりやすいタイプなんですですね……」

ん……？　なんか、ぼそぼそ言ってる……？

「ああいえ、気にしないでください、先輩。リラックスですよ。一つ質問です」

「うん……」

「先輩の好きな人は、誰ですか？」

「……あ、さくら、先輩……」

「っ……そうですか。では、今から本当の事を伝えます。あなたの人生を左右する、大事な事です。ちゃんと聞けますか？」

「……はい……」

「先輩が好きな人は、朝倉さんではありません。白石くんです」

「しらいし、くん……？」

「そうだっけ——？」

「そうです。とても大事なことですから、復唱してください。『私が好きなのは、白石くんです』はい、」

「わ……たしが好き、なのは、白石くん、です……」

「そうです。よくできましたね。上手です。さああなたが目を開けたら、大好

きな白石くんが目の前にいますよ」

手のひらがどかされて——私はうつすら、目を開けた。

白石くんの綺麗な顔が、じっと私を見下ろしている……。

私のすきなひと、この人、だっ……け……？

そうだったかも……？

「先輩はこれから、大好きな相手と、幸せで気持ちいいことをします。気持ちいいことは、好きですか？」

白石くんが指先で、私の首筋をなぞった。

優しく触れられて——身体がぞくつ、とする。

「うん、すき……」

白石くんが微笑む。

「ふふ、かわい……。それじゃあ、今からいっぱい、気持ちいい事しましょうね」

白石くんが、私の顔に顔を近づける。

その唇が、ゆつくりと、私の唇に重ねられる。

「ん……んう……♡」

私の唇を割って、白石くんの舌が入ってくる。

くちゅ、くちゅ、と音がして、白石くんが私の舌に舌をからめる。

「これって……きす……？」

「そうです。好きな人とキスするのは、自然なことですよ」

おだやかな声でそう言われて——それもそうだね、とうなずく。

深く考えることもしないで。

「わかって……た……んう♡」

「いい子ですね」

ちゅ、と頬にキスされて、白石くんの唇が、首筋から鎖骨へと降りていく。

それと同時に、大きな手がそうっと私の脇腹に触れて、トップスをまくりあげた。

胸がぶるん♡

と白石くんの目の前にさらされて——

「あ、だ、め……」

「だめじゃありませんよ。好きな人に胸を見せるのは、良いことです。さあ、服を脱いで、締め付ける下着を外してください」

「う、うん……」

そうだ。きつと良いことだ。

じつと目を見つめて命令されて、私はトップスを脱いで、背中に手をまわした。ぷちん、とブラジャーが外れて、たゆん♡と胸がこぼれだす。

解放感と、じつと白石くんに見られている視線とで——背筋がぶる、と震える。

「先輩——……上手、です、とっても素敵なおっぱいです。では、スカートとパンツも、脱いでください」

ホックをはずして、ぱさりとスカートが落ちる。むき出しになったパンツに手をかける——

「ためらわないで大丈夫。ここには俺しかいません。先輩の大事なところを、

好きな人に見せてください」

そう言われて、止まっていた手が動いて——パンツを下に降ろす。

白石くんが、舐めまわすように、裸になった私を見つめる。

「ふ……先輩の裸……すごく、綺麗です……は、じゃあ、ここに座ってください。俺の足の間です」

裸のまま、白石くんの足の間に座る。後ろから抱っこされるような形で、白石くんがささやく。

「先輩……正直に答えてください。あなたの経験人数は、何人ですか」
経験人数……？

ああ、いままでセックスした人の数のこと、か。

私は霞む頭で首を振った。

「ない……したこと」

「……ッ処女、ってことですか」

「うん……そう……」

「へえ……♡ まさかとは思ってたけど……はは、嬉しい誤算です」

学生時代は、彼氏なんて作る暇もなく、入社してから——好きな人……そう、白石くん、一筋で、だから……あれ？

白石くんて、入社したときから一緒、だったっけ……？

「あうっ♡」

けど、その思考は、乳首をくにゅ♡ とままれて霧散した。

「先輩♡ それなら……先輩は今日初めて、好きな人に処女を捧げるんですね♡ それは女性にとつてとつても、幸せなことですよ。良かったですね……♡」
「う、うん……？ んあッ♡」

耳元でささやかれながら、乳首のさきつぽをいじいじされて——きゅんきゅん♡ と下腹部が切なくなる。

「ほら、カワイイちっちゃい乳首が、どんどん固く尖ってきましたよ……♡
気持ちいい証拠です♡」

くりくり♡ くりくり♡

乳首を優しく指先で擦られて、腰が震える。

「ん……れる♡先輩の耳のうしろ……いいにおいします……♡」

乳首をいじられながら、耳朵を食まれて、舐められて——ぞくぞくつ、と背中が震える。

「いやあ♡あ……んっ……♡」

「いや、なんですか？ 今こうされてどうですか？ 正直に教えてください…

…♡？」

「んん♡く、すぐいたい♡のっ……♡」

「どこがどう？ くすぐったいだけ？」

「みみっ♡ぺろぺろされるの…♡くすぐったいの……でも、ぞくぞくする

う……♡」

「そうですか……こっちは？」

きゅ♡と乳首を摘ままれる。

「ひゃうん♡ちくび♡はあ……♡き、きもちいい♡のお……♡でも

お♡ つ、つよいのはやあ……♡ やさしくこすこす♡ がいいの……♡」

「へえ……♡ こうかな？ 先輩♡」

くにゅ♡ くにゅ♡ 人差し指と中指で、そつと乳首を挟んで、こねこねされる。

「んんう♡ あ、あ♡」

甘い痺れに、思わず膝頭をこすり合わせてしまう。

「なんか、足もじもじしてるけど、どうしたんですか、先輩？」

白石くんの手が、私の太ももをさわさわする。

その優しい感触に、思わずびくん♡ となる。

「ここ……切なくなってきたやいました？」

「う、うう……♡」

「ほら、足開いて……♡ 先輩、自分でここ触ったりします？」

白石くんの手が、足の間に侵入してくる。

「そ、それは……ッ♡」

「大丈夫♡ 正直に教えてください♡ 何なら俺も言いますよ。俺、毎晩先輩でシコってます。可愛い可愛いって言いながら服脱がして、先輩のおっぱい揉みしだいて、細い腰掴んで奥までハメまくるの想像しながら、ちんぽ握って擦って、射精してます」

ぐ♡ とその手が、足の間の秘唇に触れる。

「ほら♡ 俺も言いましたから♡ 先輩もどうやってオナニーしてるのか、教えてください♡ 恥ずかしいことじゃありませんよ」

秘唇を割って——くちゅ♡ と濡れているその場所に、指先が触れる。

「教えて♡ 先輩の気持ちいいところ♡ いつもどうやって気持ちよくなってるんですか」

指先が、いたずらに、秘唇の表面を撫でる。つぶ♡ つぶ♡ と濡れた音がして、もどかしさに腰が震える。

「そ、こじゃ、ないの……」

「へえ？ おまんこの中は触らない？」

「うん……したこと、ない、から……♡ いつもここ、触ってる……上のこと……」

「上？ なんですか？ 教えてください♡」

「く、くりとりす……♡」

「へえ♡ クリトリスを触って、気持ちよくなってるんですね？ ちょっとやってみてもらえますか？ 真似するので」

「う、うん……こ、こう……♡」

自分でおまんこを開いて、クリトリスに触れる。

「んっ♡ うう……♡ こう……♡」

軽くクリトリスを摘まんで、くに♡ くに♡ と指先でもてあそぶ。

「へえ……♡ そうやって先っぽを摘まんで、刺激すると……どんな感じなんですか？」

くにくに♡ ぷにぷに♡ 自分でいじくると、甘い刺激でクリトリスがしびれたようになって、指が止められない。

だめ……♡　こんな、好きな人が見てる前、なのにい……♡

「んっ♡　あ♡　それはあ……♡　ゆ、ゆびでくにくにするとっ♡　クリトリ
ス、きゅんきゅんってなつてえ……♡　すぐ気持ちよく♡　なっっちゃうのお
……♡」

「ふうん……♡　すぐ気持ちよくなっちゃうんだ……♡　いつも指だけ？　俺、
たまにオナホとか使いますけど……先輩は、おもちゃとか使うの？」

「っ、つかう……ときもある、かも……♡」

「へえ？　どんなやつですか？♡」

「ぶるぶるするやつ、とか……吸うやつ、とか……♡」

白石くんの手が、クリトリスを弄る私の手に覆いかぶさる。

一緒に弄るような形になって——ぴり♡　と期待にお尻が震える。

「そうなんだ……♡　それで、おもちゃでクリトリス、ぶるぶるさせたり、ちゅ
うちゅ吸わせたり、してるんだ？　そしたら、ココどうなっちゃうんです
か？」

先輩の指が、私のクリトリスをつ……♡ となでる。

「ひゃん♡ そ、そしたらあ……♡ しゅ……♡ しゅっごく気持ちよくなつてえ……♡ いくいく♡ て声がっちゃうのお……♡」

「ふ……♡ 会社じゃ清楚な顔して……♡ 先輩ってけっこう、スケベ女だったんですね……♡ 処女のくせに、クリトリスでオナニーしまくってるなんて♡」

「や……♡ ゆわないでえ……♡」

「いえ？ スケベなのはいい事です♡ それなら先輩♡ 今日俺が、いっぱいクリトリスいじくって、イクイクさせてあげますからね♡」

白石くんが、ゆるゆると指先でクリトリスを撫でる。

すでにおまんこから愛液がにじみ出ていて、クリトリスもにちゃにちゃになっ
てしまっている。

「先輩のクリトリス……柔らかいけど、しっかり尖ってますね……♡ ほら、これ、どうですか？」

さつき自分でやったみたいに、白石くんがクリトリスを摘まむ。

「おっ♡ あ♡ ああ…♡」

自分のじゃない、しなやかでたくましい手にくにくに♡ されると……

「あ♡ き、もちいい…♡ じぶんで♡ するのと、ちがうう…♡」

「ふふ♡ 腰うごいちゃってる…♡ 気に入ってもらえてうれしいです♡

ほら♡ ちよつとくにくに、速くしてみましようか♡」

こすこすこすこすこす♡

「ひおッ♡ お♡ あああ♡」

「わ、すごい♡ これだけで腰びくびくして、とぷんっ♡ てえっちなおつゆ、

おまんこから垂れてきちゃってますよ♡ 先輩、すごい感じやすいんですね

……♡」

「や♡ ああ♡ そんな、ゆわない、でえ…♡ つ♡ あおおおッ♡

くにくに♡ こすこす♡ すりすりすりすり…♡

絶え間なくクリトリスを撫でまわされる。優しい動きなのに、その快感は強

烈で苦しくて、真綿で首を絞められるようにじわじわと、気持ちよさに追いつめられていつて———どうにかそれを逃がしたくて、私は腰をくねらせながら喘いだ。

「ひぁ♡ あゝ♡ おゝおッ♡」

「先輩、声おっきくなっちゃってますよ♡ ちょっと抑えないと……両隣の人に、先輩がクリトリス弄られて気持ちよくなっちゃってるエッチな声、聞かれちゃいますよ♡」

「う、あ、むぐう♡」

そう言われて、私は唇を食いしばった。

「フフ♡ 我慢してる顔かわい……♡」

白石くんは私の顔を眺めて微笑みながら、さらにクリトリスを摘まんだ。

きゅ♡ きゅ♡ きゅ♡ きゅ♡

つらいほどの快感が、そこではじけそうになって、目をぎゅつと閉じる。

「んい♡ らめ♡ らめえ♡ い、いっちゃ♡ いっちゃいそお♡」

「ん……ほら、ちょっと声おさえて……んむ♡ ちゅうう♡」

ふいに白石くんの唇が、私の唇をふさぐ。

あ、だめ♡ キスされながら、いっちゃう………ツツ♡

「~~~~~♡♡♡」

激しい絶頂に、キスされながらも、身体がびくん♡ びくん♡と痙攣してしまふ。

「っは♡ はあ♡ はあ♡ んうう……♡」

私がイッたのを確認して、白石くんはそっと唇を離した。

「今イッちゃいましたね？ かわい……♡」

白石くんは、私をぎゅっと抱きしめたあと、そっとマットレスの上に横たえて、足の間に顔をうずめた。

「あ♡ あ♡ ちょ♡ まっ、てえ♡！」

足を開かれて、濡れそぼった場所に——白石くんの舌が当たる。
れる♡

「ん…♡ それじゃあ、今から先輩が大好きなクリ吸引♡ してあげますからね♡ でもまずは、優しくなでなでしましょうね♡ イッたばつかですし♡」

れろ♡ れろ♡ れろ♡ れろ♡

「あっ♡ あゝ♡ おあゝッ♡!」

ねっとり優しく、下から上へとクリトリスを舐められて、とろけるような切ない刺激に、腰がわななく。

「先輩♡ 声おおきい♡ ふふ♡ 次はもっと、たくさん叫べるところであげますから♡今日はちよっと、抑えて…♡ でないと、先輩がまたクリイキしそうになつてゐるの、みんなにバレちゃいますよ…♡」

そ、そんなのダメえ……。こんな情けないところ、他人にバレちゃうなんて……♡

「うゝっ♡ うううゝ♡」

「ふふ♡ そうそう♡ 口抑えてもいいですよ…♡ ほら、クリトリスのまわり、くるくるゝって舐めてあげますからね…♡」

ぺろ♡　ぺろ♡　くちゅ♡　くちゅ♡

いやらしい水音が股間から響くたびに――びくびくと震える。

ダメ、言ったばかりの場所、そんなされたらあつ……♡

「~~~~ッ♡!!!!……ッ!!!!」

「ふふ、我慢できて上手……♡　1回イッちゃったクリトリス、気持ちいいですねえ……♡もつともつ♡　おもちゃでイクより気持ちよくしてあげますから♡　ほら♡」

むちゅ♡　白石くんの唇が、敏感になっているクリトリスを包み込む。

「ほら♡　こうやってクリトリスを唇で挟んでちゅっちゅ♡　吸いながら、さきっぽれろれろ……してあげます♡」

ちゅう♡　ちゅッ♡　ちゅう~~~~ッ♡

れろれろれろ……♡

「!!!!!!ッ♡　~~~~~~~~ッ♡♡」

強すぎる刺激に、目が白黒する。

お腹の奥から背骨までぞくぞくして、声が出ないように、口をぎゅっと抑える。

「ふふ……我慢してる顔かわい……♡ おまんこも、こんなによだれたらしちやって……♡」

ちゅっ♡ ちゅうう♡

吸われながら、くに、と陰唇が開かれ——白石せんぱいの指が、ねじこまれる。

「んううッ!? ううッ♡」

「ん♡ ちゅっ……♡ やっぱりきつ……♡ほんとに処女なんですね♡ せんぱあい……♡ 初めての恋人セックスですから……ゆっくりほぐしてあげますからね♡」

クリトリスに刺激を与えられながら、ぬ♡ ぬう♡ と、ゆっくりゆっくり、先輩の人差し指が、膣に挿入されていく。

「はッ♡ あ、んうううッ♡」

絶え間なく快感を与えられているせいか、挿入の圧迫感はほぼなくて、むしろ――

「んっ♡ あ♡ すごい♡ ちゅっ♡ てクリトリス、吸うたびに……ナカ、きゅう♡ って締まってますよ♡ あ……キッツいけど、根本まで、はいりました♡」

くりゅ♡ くりゅ♡

白石くんが、ずっぷりいれたまま、指をくっ♡ と曲げた。

「?!ッ♡♡?!」

ナカで、じいん♡ と快感が広がる。

おもらしても漏れちゃいそうな、じんわりとした感覚だ。

「らっらめえ♡ ソコおしちゃああ♡」

「んっ? どんな感じですか? 押されるの」

「おっ♡ おなかんなかッ♡ きゅんってなっ♡ ヘンなお……ッ♡」

「へえ♡ それってきつと、気持ちいいってことですよ♡ 先輩、俺に指すぽ

ずぼされて、おまんこ気持ちよくなってるんです♡」

「へあ♡ あ♡ ああッ……♡」

「またクリトリスちゅっちゅしながら、処女おまんこやさしくずぼずぼしてあげますからね……♡ イイでしょ？ おもちゃより、俺の方が……♡」

ちゅッ♡ ちゅッ♡ ちゅッ♡

くほ♡ くほ♡ くほ♡ くほ♡

「あッ♡ ひやめ、あ、あッ……♡」

ナカとクリトリス、同時に攻められて、ぞくぞくと波が押し寄せるように、快感が大きくなっていく。

だめ、だめ、どっちもなんて、そんな……ッ♡ またイッちゃう……ッ♡

「んッ♡ ツ……ツ……ツ……ツ……ツ……ツ……♡……！！！！」

中とクリ、同時に電流が走ったように、快感が炸裂する。

がくがくと弓なりになって、強すぎる快感をやりすごす。

「んあ♡ あ♡ もお……うん……♡」

快樂が過ぎ去っても——クリトリスは敏感なまま、膣の中は、じいんと熱く疼いている。

唇を震わせていると、再び優しくキスでふさがれる。

「ッ♡って、必死に声我慢しながらイっちゃうの、すっごくえっちで可愛かったですよ、先輩…♡」

言いながら、くぱぁ♡とおまんこを広げられる。

「ほら……おまんこひくひくして、切なそうにしてるの、わかります？ さっき指でトントンして気持ちよかったところ……今度は俺の太くて固いので、ゆーっくり優しく、ごりゅごりゅ♡ こすりたいですよね？」

そんなことされたら……♡ 想像しただけで、下腹部が熱くなって、たたり…♡ と愛液があふれた。

「ね♡ 俺に先輩の処女ください♡ ズーっと好きだった俺と、あまあまで幸せな処女喪失セックス、したいですよね……？」

耳元で、低くて甘い声でささやかれて——頭のなかで、ふわふわピンク色に

なる。

「うんっ……♡ し、したい……♡ 白石、くんとお♡ しあわせ恋人セックス、したい……♡」

白石くんが器用に下半身を脱いで、生のおちんちんをぐっ♡と太ももに押し付けてくる。

「ふ……く……ッ♡ 嬉しいですっ……♡ お、俺もしたくてたまらないです、先輩とラブラブ恋人セックス……ッ♡」

足を開かれて——ぬれそぼった膣口に、白石くんのがあてがわれる。

「挿れますよ♡ 先輩の処女ッ♡ 俺がもらいますっ♡ 〜〜〜ッは♡ あ、くう♡ きつつ……！ 先っぽねじ切られそうッ……♡」

ぐ、ぐぐ……♡

先輩の先端が、秘唇を割って、入口にねじ込まれる。

「は♡ こんなに濡れ濡れなのに♡ 先輩のおまんこきつすぎてッ♡ お……♡ ほんとにおにッ♡ ここ入るの、俺が初めて、なんすね……ッ♡ は、うれ

し……♡」

ゆっくり、ゆっくり、白石くんのモノが、肉を割って入ってくる。

圧迫感と、そしてたしかな鈍い熱が、お腹の中を焙る。

「ん♡ はぁ♡ 先輩が痛くないように♡ は、ゆっくり、行きますよ……

あ♡ は、入った……ぜんぶ……♡ はぁ♡ 俺たち、ひとつになりましたよ

……♡」

スローペースで、ゆっくり、白石くんが腰を動かす。

「っおッ……♡」

大きなものが、行ったりきたりして——お腹の中、全部引きずり出されそうに熱い。

「はぁ♡ すご♡ ちょっと動いただけで、腰ぜんぶもってかれそう……♡

は、ナカ、ぎゅうぎゅう締め付けてッ……♡ ふ、ここ、でしょ？ 先輩の、

好きなどこ……♡」

ぐうう……♡ と、おちんぽで、おまんこのお腹側の天井を擦られる。

鈍痛みたいな、鈍くて熱い快感が、おちんぼと一緒にいつたりきたりして――

「あッ♡ しらいし、く……♡ そこお♡ らめえ……♡ッ♡」

「ふふ、やっぱりここだ♡ 先輩のちっちゃいお腹ン中……♡ 俺のちんぼでいっぱいになっちゃってますね♡ 気持ちいいところ、いっぱいおちんぼでごりゅごりゅしてあげますからね……♡」

ぬちゅッ♡ ぬちゅッ♡ ぬちゅッ♡ ぬちゅッ♡

お餅をつくみたいな、濡れたいやらしい音が個室に響く。

「は……♡ あ♡ 先輩んナカ、気持ちいい……♡ 妄想してたよりもずっと……♡ 先輩のおまんこ、熱くて、きつつきつで……」

腰をねっとりうごかしながら、白石くんが私の前髪をかきあげた。

「俺の下で、先輩が――ッ♡ いつも笑顔で、俺に挨拶したり話しかけたりしてくる先輩がッ♡ やらしい顔して、俺のを受け入れてるの、たまんな……ッ♡」

言いながら、おちんぼが、ぬらあーっ♡と出て行って、そして、またナカを擦る。

「は♡ おおッ♡ あッ……♡」

「はあ♡ はあ♡ ナカ、ちよっとこなれてきましたね…♡ 少し速度、上げますよ♡」

ずちゅ♡ ずちゅ♡ ずちゅ♡

先ほどよりも小刻みに、白石くんが腰を動かしたす。

「くっ♡ あ、あ、あッ♡」

狭いナカをかきわけて、白石くんのおちんぼが、ずっぷり奥の奥まで飲み込まれていく。

「お、おっき♡ いッ♡ や♡ も、っ♡ ゆっくりい…♡」

必死に懇願する。

「ふふ♡ でも先輩のおまんこ、俺のことぎゅっと抱きしめて気持ちいい♡ 気持ちいい♡って言ってますよ?」

「あ♡ あふッ♡ あ、きもちい、けどお♡ 奥らめえ…ッ♡」

「安心してください…♡ おまんこの奥の奥まで、俺のちんぽでずぼずぼ犯されちゃうのが、幸せ恋人セックスですよ♡」

そうなの……かも……♡？

ずっぷ♡ ずっぷ♡ ずっぷ♡

「はゝ気持ちいい♡ すっごく気持ちいです♡ ね？ 先輩は？ 先輩も気持ちいですよね？ 俺のおちんぽ奥までハメられて、幸せですよね？」

ぐりゅッ♡ ぐりゅッ♡ ぐりゅッ♡

容赦なく奥を亀頭でえぐられて、何も考えられなくなる。

「は♡ あ♡ き、きもちい♡ しらいしくんの♡ おちんちん……気持ちいい♡ 恋人せつくす……し、しあわせえ……♡」

「ゝゝゝッ♡ ですよね♡ 俺も幸せ♡ は、先輩の奥、俺のおちんぽで突くたびに♡ チュッチュッて吸い付いてッ♡ キスしてくれる…ッ♡ は、たまんな…ッ♡ 先輩は俺のこと♡ こんなに、大好き、なんですよ？？？ッ

♡」

ずっぽ♡ ずっぽ♡ ずっぽ♡

貫かれるたびに、膣の奥が切なく疼いて、きゅうきゅうおちんぽを締め付け
ちゃう……♡

そっか、私……♡

「うんッ♡ しゅ、しゅきな♡ おちんぽしゅきいッ♡」

「は♡ お、俺たちもう、相思相愛♡ 恋人同士、ですネッ♡ いつでもこう
やって、気持ちいいセックスしてあげますからッ♡ ずっと一緒にいましょうね
ッ♡」

ぐぽっ♡ ぐぽっ♡ ぐぽっ♡

おちんちんが奥を突くたびに、甘い快感が、じゅわりとお腹じゅうに広がっ
ていく——♡

「俺ちゃんと責任取ります♡ 職場でもっ♡ 婚約しましたって、発表、しま
しょうねッ♡ もう2度と、先輩に、変な虫が寄り付かないようにっ♡」

「はえッ♡ こ、んやく…♡?」

「そうですよ♡ ちゃんと法的に明らかにしましょう♡ 先輩はッ♡ 俺の女
だつてッ♡ そうですよね???♡ だって、先輩が好きなのは誰?」

「は♡ 私が、好き、なのはあ…♡」

そう言われて、なんだか頭のなかがチカチカする。

私が好きなのって、頼りがいがつて、年上で——あれ?

頭の中にもやがかかったみたいで——言葉が出てこない。

「ほら♡ ちゃんと言つて♡ 言つてくれたら、思いつきり奥、ごりゅごりゅ
してあげますから♡」

ぬこ♡ ぬこ♡ ぬこ♡

白石くんが、いったん浅く抜きさしする動きに戻る。

奥までおちんぼが届かなくて——物足りなさに、お腹が疼く。

「ん…うう♡ いじわる、しないえ…♡」

「ほら♡ ちょっとお預けしたら、もうひくひくほしがってる♡ あげますか

ら言ってください、大事なこと♡ ほら、先輩が好きなのは？ 目の前の男は誰？」

「あ♡ わ、わたしが好き、なのはあ……しらいしくん♡ しらいしくん…ッ♡」

白石くんは私をぎゅっと抱きしめて、指に指をからめた。

「は♡ 上手に言えました♡ とっても大切なことですからね♡ 忘れちゃダメです…よッ♡」

ごちゅんッ♡

奥をいきなりえぐられて、目の裏に星が飛ぶ。

「おッ……♡」

「は、締まるッ……♡ 先輩のおまんこ、健気に締め付けてきてッ♡ は、一緒にイきましょう♡ 恋人おちんぽとおまんこ、奥でひとつになりながらッ♡」

ばちゅんッ♡ ばちゅんッ♡ ばちゅんッ♡

「お♡ あッ♡ い、いぐ♡ 一緒にいぐ……ッ♡」

「おかしくなるくらいッ♡一緒に気持ちよくなりましょう、先輩……ッ♡」

「うんッ♡あ、や、いくッ♡いっちゃうッ♡」

「は♡俺もッ♡出します♡先輩のおまんこの奥ッ♡彼氏のザーメン受け止めてくださいッッッ♡」

「あッ♡ああ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ッッッ♡」

ナカでおもいきり、白石くんのものが脈打つ。

深い場所を穿たれる衝撃が体中に広がって——目の前が真っ白になる。

もう、ちゃんと息もできないくらいに……。

「あ……♡はあ♡はあ♡先輩……いっしょに、イッちゃいましたね

……♡ふふ、幸せ……♡」

ずる……♡と白石くんが、おちんぼを抜いた。

くふ♡と音がして、白石くんが微笑む。

「見てください……♡こないっぱい出た……はー♡」

白石くんが摘まんだゴムの先には、重たげにたつぷりと白濁液が溜まってい

た。

たしかに、いっぱい……あんなの、もし中だしされたら、絶対妊娠しちゃう

……♡

「ふふ、先輩、目がとろんとしてる♡ 初めてのセックスで、体力使い果たしちゃったんですね」

起き上がれない私の身体を、白石くんは守るように抱きしめた。

「それじゃあ、暗示、解いてあげますね……目を閉じて……」

言われなくても、もう体が限界で、私は目を閉じていた。

「10数えたら、先輩はこのセックスのことを忘れます。けれど、気持ちよかったことも、俺を好きな気持ちも……心の奥の奥に沈んで絶対消えません……」
さざ波のように、優しい声が、私の鼓膜を通して、脳に、心に——染みわたっていく。

「また明日、俺が10数えたら、先輩はまたこのセックスのことを思い出して、幸せな時間を、俺と過ごします……先輩が望めばいつでも、俺はその時間を提

供します……またすぐに気持ちいいセックスをしましょう、先輩……」

甘い声に、幸福感を感じながら——だんだん意識が沈んでいく。

「さあ、力を抜いて……1、2、3……」

ぼんやりと、意識が眠りの波に飲まれていく。

「先輩……嬉しいです……あなたとこう、なれて……」

最後に、白石くんの嬉し気なさやきが聞こえた気が、した。

「きつとこうしてれば、先輩はいつか本当に、俺のことを……」



いやあ、金曜日は醜態をさらしちゃったなあ……。

月曜日の朝、そう反省しながら、私は身支度をして、家を出た。

あの飲み会のあと——私は気が付いたら、ネットカフェのマットレスの上に横になっていた。

頭の痛みはすっかり消えていて、ついでに白石くんも消えていた。

多分、私をネカフエに押し込むまでの面倒を見て、帰ったんだろう。

酔っ払いの介護をさせて、申し訳ないな。ちゃんとお礼をしなきゃな……。

そう思いつつ、会社までの道を歩いていると、ちよつと足の間に違和感を感じて、顔をしかめる。

あの飲み会のあとから、なぜか乙女の大事な場所に、妙な痛みがあるのだ。なんだかずつと、何かを挿れられていたような――。

（いやいや、ありえない。だって私、未経験なんだから……。）

もう、何だろう。こんな所が痛むなんて……どこかで転んでぶつけたとか？ いや、さすがにそれはないか……。

はあ、とため息をつきながら出社すると、先に白石くんが来ていたのでさっそく声をかける。

「おはよう白石くん、金曜は世話かけたね……！」

白石くんがふりかえる。

「ああ：おはようございます、先輩」

あれ？ どうして白石くん、ちょっと笑ってるんだろう？

めったに見ないから——なんか。

「ど、どうしたの白石くん。今朝はあいそがいいね」

ふいにドキッとしてしまって、慌てて目をそらす。

「だって先輩が、もっと笑った方がいいって言ったんじゃないですか」

「そ、そうだったね……」

「先輩、どうしたんです？ そっぽ向いて」

白石くんがふいにのぞきこんできて、心臓がどくんと跳ね上がる。

わ、私——どうしちゃったの？

「な……なんでもないの、ごめんね」

「そうですか……？」

顔をそらしたままつぶやくと、白石くんが心配そうに、私の肩に手を置いた。

「っ…!？」

その手の感触に、なぜかびくん♡と身体が反応してしまう。

「本当に大丈夫ですか？ 顔、赤いですよ……？」

「だ、大丈夫大丈夫、あはは、ね、寝不足かも……？」

適当な事をいってごまかしたけど——内心、すごく動揺している。

なんでこんなに、白石くんときめいちゃってるの？

私が好きなのは、■■■先輩のはずなのに。

……あれ？ なに先輩だっけ？ うん、先輩ってなんだ？

私が好きなのって、先輩じゃなくて後輩？

私が告白しようとしたのって……誰、だっ、け……？

「先輩？ ぼんやりしてどうしたんですか？」

「えっ!? ああ、うん、ごめん、ちょっと考えこんじゃって……」

「何か悩み事ですか？ 仕事のことなら、俺、力になりますよ」

なんか突然、白石くんが優しくなってびっくりする。

彼もこの部署にきて、丸くなってきたのかな？

そう思うと、なんだかちよっぴり誇らしい。私の手柄じゃないけど……。

「ううん、ありがとうね。でも、じゃあ、ちよっと残業付き合ってもらっていいかな？ 急ぎの作業があつてさ……」

「仕方ないですね、いいですよ」

白石くんがにっこり微笑む。その目が妖しく光ったような——でも、気のせい、だよ。



「先輩。先輩。大丈夫ですか？ 残業中に居眠りなんて……」

突然、肩をたたかれて揺り起こされて、私はデスクで顔を上げた。

「あ、ごめん、私ったら……んんう!?♡」

上半身を起こした瞬間、お腹のあたりにずくん♡ と甘い衝撃が走った。

「っあ……♡!? あ。ッ……!?」

突然、下半身——子宮のあたりがきゅううんッ♡ と切なくなる。
それに呼応して、どぶ♡ どぶ……ッ♡ と、足の間からぬるい液体が零れ落ちる。

「は……あ♡ あ……ッッ」

はあはあと必死に呼吸しながら、目に生理的な涙がにじむ。

膣口がきゅんきゅんうずいて、あふれだした液体でねばっている。

「せ、先輩？ 体調悪いんですか？」

隣のデスクの白石くんが、私の肩を支える。

それでまた、身体がびくん♡ と反応してしまうので、必死に抑える。

「は♡ だ、だいじょうぶ……ッ♡」

なにこれ？

私の身体——どうかしちやっただろうか？

「だいぶしんどそうですよ……」

白石くんが私を覗き込む。

——ドキドキするから、やめてほしい。

「先輩、残りの作業は俺が今やっちゃいましたから、もう帰りましょう。もう皆帰りまししたし」

「えっ、やってくれたの？ 私が居眠りしてる間に……？ ごめんね……」

「いいですよ。別に。それよりオフィスで先輩が倒れたりする方が嫌ですよ。ほら、歩けます？」

大丈夫、と言ったけど、白石くんは私に肩を貸してくれた。

身体が密着して——白石くんこんなに触れるのなんて、初めてのはずなのに、なんだか妙に、親近感がある。

その腕も、手指の感触も、唇の感触までも、知っている気がする。

まるで、さっきまで抱き合っていたような——？

（や、やだ、私ったら部下に対して何考えてるの……立派なセクハラだよっ）

疲れすぎてるのかな？ 最近の私は、ちよつと何か、変だ。

病院でも行った方がいいのかもしれない。

「心配だから、先輩の家まで送っていきますよ」

「え!? そんなの悪いよ」

「いいですよ。先輩の家ってA町の方ですよ。ついでなんで、乗ってってください」

そういえば白石くんって、車通勤だった。

「そう? じゃあ……お願いしようかな……」



それからたびたび、私は会社の帰り、白石くんに送ってもらうようになった。先輩にこんなに甘えてしまうのは申し訳ないが、なにしろ身体がだるすぎるのだ。

それに……最近なんだか、白石くんの事が気になるのだ。一緒にいるとドキドキして……つい、帰りの誘いを断りきれない自分がある。

私、たぶん、白石くんの事が……。

「ん……あ、また寝ちゃった……」

はあ、とため息をつきながら、私はベッドから起き上がった。

白石くんに車で送ってもらったあと——なぜかいつも、ベッドで目を覚ますのだ。

と、いうことは、白石くんに、お礼も言わずに眠り込んでるって事で……。

「え、もう朝……？　ほんとに私、どっかおかしいのも……？　って、うわ……」
ぬるり、と足の間がまた湿っている上に——なんだか体中に、心地よい倦怠感がある。

「やだ……何これ……」

まるで、連続でいきまくった後みたいな疲れぐあいだ。

トイレに行ってみると、足の間には透明な液体があふれていた。その上、お腹やふともものに、ところどころ赤いあざがついている。

「いよいよ、病院に行った方がいいのかも……」

でも、こういう場合って何科に行けばいいんだろう？

それに——気が付いたらお股が濡れてるんです、なんて、恥ずかしくてとても言えそうにない。

「うう……どうすればいいんだろ……」

とりあえず、スマホに手を伸ばして、適当に検索してみる。

意識がなくなる、覚えがないのに濡れてる……と。

「尿失禁……うーん、おしっこじゃなさそうなんだよね……自律神経の乱れ……これはあるかも……」

Google のページに次々と表示される病状をスクロールしていくと、下の方に、アダルトサイトの見出しが現れた。

「あなたが寝ている間に……催眠洗脳レイプ!？」

はあ、バカバカしい。私はスマホを放り投げたくなった。が、次の瞬間、同期からのメッセージがポンつ、と表示された。

『ね、朝倉先輩の送別会、日時決まったよ！ 頑張ってね』
そうだ、朝倉先輩。久々にその名前を思い出した気がする。
でも——あれ。送別会だからって、私が何を頑張るんだっけ……？



「気合い入れてけ！」と、同期にやや乱暴に背中を押されて、私は薄暗い居酒屋の廊下に立っていた。

朝倉先輩の送別会——彼はずっと仲間に囲まれていたけど、トイレに抜けてしまったので、私はトイレ帰りの朝倉先輩を待ち伏せしている形になる。

とはいえ……ええと、何を伝えるんだっけ？

「お、どしたん？ こんなとこつたつて」

「あ…朝倉先輩」

先輩が、いつも通りの気さくな笑顔を私に向けてくる。

ええと。

「先輩、私、入社の中から本当にお世話になって…ほんとに、感謝してます」
あれ…私の言いたいことって、こんなこと、だっけ…？

「ん？ どした、急に改まって。でも、ありがとな」

先輩の、ちよつと照れたような笑顔を見て、胸の中で、何かが動いた。
そうだ。私、ずっとー。

「先輩、私、朝倉先輩のこと、が……！」

そうだ。思い出した。私はずっと、朝倉先輩の事が好きだった、はず。

（な、なのに。なのになんで、白石くんの顔が浮かぶの…？ なんで私、白石く
んのこと、好きに、なったん、だっけ…？）

わからない。思い出そうとすると、頭の中に霧がかかったようになる。

何か忘れてる気がする。大事なことを。

「う……」

頭が痛くなってきて、わたしは床に膝をついた。

——白石くんに会ったあとに途切れる意識。経験なんてないはずなのに、ぽつかり開いて濡れている足の間。体中に残る、謎の赤いあざ。

……そう言えば、最初にネカフエで意識を失ったあの時、白石くんは私に『暗示をかける』と言っていなかったか。

「あ、わた、わ、私……」

ネットで見た、『催眠レイプ』の文字が頭に浮かぶ。

「おい、大丈夫か？ 体調わるいのか？」

朝倉先輩が心配して、私の体をささえてくれる。

その時、後ろから冷たい声が響いた。

「先輩、なにしてるんですか、そんなところで」

「し、しらいし、くん……」

彼の顔を見るのが怖い。

(……………続きは本編で！)

憧れの人に告白するって言ったら、『は？ あなたが好きなのは俺ですよ
ね？』とハイスベ後輩に精神暗示をかけられて、いちゃらぶ調教恋人
セックスで墮とされました

～塩対応ヤンデレ後輩の重い愛～

制作/冷凍ばいん

発行/2026.2.20

メールアドレス